

日本における「八景」について～景物の歴史の変遷を中心に～*

石立裕子（学籍番号 200821642）

研究指導教員：綿抜豊昭

1. はじめに

日本には「八景」と名のつく景勝地が多くある。2007年の国立環境研究所研究報告 No. 197により、893の「八景」が確認され、約700年の歴史をもつことが報告された。近年では、「八景」を日本人による風景評価法の一つであると考えられる傾向にあり、都市計画にも応用しようという流れがある。

「八景」については風景学や芸術、文学の視点で様々な研究がなされてきたが、「八景」の8つの題である景物についての研究はなされておらず、本研究は「八景」を景物という視点を中心に考察したものである。

2. 瀟湘八景

日本の「八景」のもととなった「瀟湘八景」とは、11世紀末の中国・北宋代の文人画家・宋迪によって創始されたといわれている8つ一組の水墨山水画題のことである。それぞれ、《平沙鴈落（落雁）》《遠浦帆歸（帰帆）》《山市晴嵐》《江天暮雪》《洞庭秋月》《瀟湘夜雨》《煙寺晚鐘》《漁村落照（夕照）》という。特定の場所を描いたものではなく、湿潤なこの地方一帯に画趣を見出したものであり、画中に現れる季節は秋と冬のみである。

3. 近江八景

後の日本の「八景」に影響を及ぼした可能性が高く、日本で最も著名であるのが、滋賀県琵琶湖南西域から選定された「近江八景」である。16世紀初頭に公家・近衛信尹により選定されたと言われて

おり、それぞれは《栗津晴嵐》《瀬田夕照》《三井晚鐘》《唐崎夜雨》《矢橋帰帆》《石山秋月》《堅田落雁》《比良暮雪》である。

「瀟湘八景」とは違い、古代からの名所から意図的に選ばれており、描かれる対象が明確である。「瀟湘八景」の景物を継承しているが、対象が多少異なり、松や橋等が新たに対象に加えられている。

「近江八景」は江戸時代中期頃から版本に見られ、江戸時代後期には浮世絵に頻繁に描かれた。時代が下るにつれ、描かれる要素が簡素化しており、一般に普及していった過程を示している。

また、「近江八景」以後に選定された「八景」には、橋や松が多く選定されており、このことは、「近江八景」が他の「八景」の景物の選定に影響を及ぼしている可能性を示している。

4. 日本の「八景」

今回の調査では、榊原氏によるリストより 893、全国公共図書館の OPAC による検索結果より 176 を加え、合計 1,069 の「八景」を確認するに到った。

都道府県別に選定数をみると、上位 5 位まで関東地方が独占しており、全体的に東日本でより選定されている。

また、「瀟湘八景」は主に水景であるが、内陸の群馬県は上位 2 位である。群馬県には川が多く、水景の対象としては専ら川が選ばれている。水が豊かであることが、日本で「八景」選定が盛んになった一因ともいえよう。

時系列にみると、鎌倉時代後期より選定が行われているが、増加し始めたのは、「近江八景」以後の江戸時代中期頃である。さらに急増したのが江戸時代後期から明治にかけてであり、ここ数十年は減少傾向にある。

* “The Study of “Eight scenic views” in Japan –mainly the historical transition of titles-” by Hiroko ISHIDATE

5. 日本の景物

今回確認した 1,069 の「八景」において、その内の8つの景物を 2 種類に分類し、分析考察した。「瀟湘八景」の景物を踏襲した瀟湘景物と、それ以外の独自景物である。それぞれの括弧内の数値は、選定数を示している。

5.1 瀟湘景物 (3, 686)

選定数の多かった順は、以下の通りである。景物の後の数値は、それぞれの選定数である。

《秋月 525》《晚鐘 496》《夕照 461》《夜雨 455》
《暮雪 454》《晴嵐 453》《落雁 438》《帰帆 404》

これよりわかることは、選定数の多い景物は、条件となる対象がどの地でも見られる月や寺などになっていることである。反対に選定数の少ない《帰帆》などは広域の水景を必要とする。よって、景物の示す対象が選定数に影響を及ぼしているといえる。

5.2 独自景物 (1, 906)

景物が示す対象を項目として分類し、分析した。

「植物」を含む景物では、松(78)・桜(70)・紅葉(61)が上位3位をしめ、この3つでこの項目の半数を占める。どれも伝統的な景物であり、日本を代表する対象であるといえる。

「虫・鳥・動物」を含む景物では、蛭(71)・雁(27)・ホトギス(27)が上位3位を占め、項目の半数を占める。蛭とホトギスは、日本の夏の代表する虫・鳥である。また、雁は「瀟湘八景」の《落雁》の変化形とみえる。特筆すべきは項目における鳥類の多さである。雁が飛来しない地域で雁の代替として選定されたからと考えられる。

さらに、「瀟湘八景」の景物対象である「鐘」や「月」を含む景物も多く、これについても分析した。

「鐘」を含む景物での最多は、《暁鐘》である。時間帯を示す字と組み合わせられた景物が多く、他には《震鐘》など気象や、《鯨音》音そのもの、《梵鐘》鐘そのものなどが選定されていた。

「雨」では「瀟湘八景」の《夜雨》と意味が近い《夕立》などの他に、《秋雨》《時雨》など季節示すもの、《坂雨》《峠雨》など地形を含むもの等もみられた。

「月」は最も景物の種類が多く 53 種に上った。「近江八景」の《石山秋月》を想起するような《庵月》《観月》等が多くみられた他、「瀟湘八景」の《秋月》を想起するような《池月》《浦月》等、水景との組み合わせもみられた。

「雪」では、「瀟湘八景」の《暮雪》が示す降雪の風景よりも、「近江八景」の雪山のイメージに通じる景物が多くみられた。

また、時候を含める景物についても分析した。

「季節」では、春と秋がより多く選定されており、この傾向は勅撰和歌集に通じるところがある。さらに、独自景物のみで構成された「八景」では、四季が概ね同じ割合で選定されており、撰者は四季の分配を意識していたと思われる節がある。

「時間帯」では、朝が最も選定数が多く、暁と夕は景物の種類が多いことがわかった。

6. おわりに

本研究で、日本における「八景」の地域別時系列別にみる選定数の特徴がわかった。

また、「近江八景」以降の「八景」には、「瀟湘八景」より「近江八景」に影響を受けたと思われる景物が多く選定されていることがわかった。

今回、景物を含まない名所型八景については触れなかったが、昭和以降の「八景」は主に名所型であるため、今後は名所型の分析もしていくべきである。また、日本における「八景」の特質をより明確にするには、中国周辺諸国における「八景」の様相についても調査していく必要があると思われる。

文献

- [1]青柳陽二, 榊原映子編. 八景の分布と最近の研究動向. 国立環境研究所研究報告, no. 197, 2007, p. 255.
- [2]堀川貴司. 瀟湘八景. 臨川書店, 2002, p.218.
- [3]芳賀徹. 風景の比較文化史『瀟湘八景』と『近江八景』. 比較文学研究. 1986, vol. 50, no. 10, p. 1-27.